
光と闇の境界線

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の境界線

【Nコード】

N3072B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

吸血鬼のブレイズと、人間のパティス。ひよんなことから共同生活を営むようになった二人は、お互いに惹かれあっているのになかなか素直になれず、すれ違ってばかりだった。そんな折、ブレイズの元を一人の女性が訪れて――。「月夜の約束」(http://ncode.syosetu.com/n2519b/)の続編。

- 序 -

満月の夜。

白一色の世界の中で、彼女は消え入りそうに儚げに見えた。

いつも通りの気まぐれな散歩の途中、たまたま見上げた窓辺に彼女の姿を見付けて足を停めてしまったのも、今思えば運命だったのだろう。

彼女を眼にした瞬間から何故か気になってしまい、いつもなら決して取らないような行動を起こしてしまった。それだって、きっと必然だったのだ。

足音を忍ばせて彼女が見えた窓から室内へと侵入した俺に、数回不思議そうに瞬きをすると、彼女は至極おっとりとした問いかけをした。

「貴方、だあれ？」

普通なら突然現れた窓からの闖入者に、悲鳴のひとつもあげないだなんて考えられない。ましてや相手は男だ。

けれども彼女にはそんなことよりも俺が誰であるのか、のほうが大切だったらしい。

「俺は……」

予想に反した誰何すいかの声にふと言いよんどんだけれど、彼女に嘘をつくのはいけないことのように思えた。

「ブレイズ……」

逡巡した後、少し躊躇ためらいがちにそう返すと、「いい名前ね」と微笑みかけられた。

「……お前は？」

その笑顔につられるように思わず聞いてしまったから、自分でも驚く。

「私は……シルバミ」

白磁のように――そう、生きている人間にしては余りにも白すぎる肌をした彼女は、淡い笑みを浮かべて自己紹介をした。

「お前こそ、いい名前だな」

「有難う」

言えば、また花のような笑みが返る。

いつもの自分とは明らかに違ってしまっている言動の数々に、内心軽い舌打ちをしながら、俺は彼女の横たわるベッドに歩み寄った。そうしたところでシルバミが怯えた様子を見せないことに酷く安堵したし、心のどこかで彼女ならばそういう怯えを見せずに俺を受け入れてくれるのではないかという期待もしていた。

ベッドサイドで彼女を見下ろす俺に、少女のように可憐な笑みを浮かべると、シルバミは横になったままそつと手を差し伸べてきた。

「……？」

その行動の意図するところがつかめず、思わずきょとんと見つめ返すと、

「お友達の握手」

こともなげにそう補足する。

「私ね、ずっとここにいて……お友達、いないから」

だからなつて欲しいのだとその目は語っていた。笑顔で告げられているけれど、その言葉の中にひしひしと感じられる「寂しい」という思い。

それは、長い時を一人で生きてきた俺にも十分理解できる感情だったから。

だから、彼女の手を握り返してしまっただんころつ。

「よろしくな」

それが、俺とシルバミの出逢いだつた――。

先の満月の晩、パティスはブレイズと一緒に生きていこうと決意してここ——ブレイズの館——を訪れた。

パティスがブレイズと初めて出会ったのは、彼女が十二歳のとき。その頃のパティスは、父の再婚という現実から逃げ出たくて家族との間に壁を作っていた。

家出も、そんな折に二人——父と義母——を困らせたくて実行したことだ。

表向きは義母を追い出してやるためだと自負していた。でも本当は父の再婚によって今まで築いてきた己の居場所がなくなるのではないかという恐怖と、自分がそのポジションを追われることで亡き母への思いまでもが奪われてしまうのではないかという危惧にとらわれてのことだ。

でも、パティスには分かっていた。

本当は、自分が新しく来た母に甘えたかったのだということが。年の割にしっかりした女の子。仕事以外の面では思いっきり頼りない父を、何不自由なくサポートすることが出来る少女。

そういう仮面を脱ぎ捨てて、年相応の子供として大人に甘えてみたかった。

でも、そうしてしまうと亡くなった母はどうなってしまうのだろうか？

父は、義母を受け入れることで母のことを思い出の中の人として整理してしまったように思えた。

この上パティスまで義母を母として認めてしまったら、鬼籍の母はどう感じるだろう。

誰も母のことを思い出さなくなってしまうたら、それはすごく哀しいことなのではないだろうか。自分だったらそんなの耐えられない

い。

そう思うと、どうしても素直になれなかった。

せめて自分だけは母がこの世に存在していたのだということを誇示しなくては。

そう思つて頑張つていたのだ。

ブレイズは、そんなパティスの揺れる心を的確に読み取り、そうして背中を押してくれた。

パティス一人が頑張る必要はないのだ、と。

誰かに甘えたいときには甘えていいし、亡き母を恋い慕う気持ちは忘れなくてもいいのだ、と。

新しい母が来たからと言って、死んだ母親の存在が消えるわけではない。

大切な人は、自分がそれと忘れなければ、いつでも傍に居てくれる。

生きている自分たちが、何かの折にその人のことを思い出してあげられたなら、それでいいんじゃないか？

言葉にしてはつきり告げられたわけではなかったけれど、パティスはブレイズがそう言ってくれているように感じた。

十年前のあの日、逃避行の地として、偶然にもブレイズがいるこの町を選んだこと。そうしてブレイズに出会えたこと。それはパティスにとって一生の宝物だったと思う。

あのとき、パティスがブレイズと共に過ごした期間はほんの一瞬だったけれど、それはパティスが彼に心奪われるには十分過ぎる時間だった。

寂しい目をした、素直じゃない吸血鬼。

その彼の、不器用だけど精一杯の愛情が、パティスにはとても心地よかった。

成長したら必ずブレイズの元へ戻ってくると約束して彼と別れた時点で、パティスは大きくなったら必ずここへ戻つてしようと決意

していたのだ。

何年経とうとそれは変わらない思いで――。
だからこそ、約束通りパティスはブレイズのところへ帰ってきたのだ。

ブレイズも、あのときの言葉を忘れずパティスのことを待っていてくれた。

それが凄く嬉しかった。

少女から大人へと成長し、一人のレディへと変貌を遂げた自分ならば、ブレイズの横に立つても大丈夫だと思えた。

もう子供扱いされて頭を撫でられたりからかわれたりすることなく、彼の横にいられる。

十年ぶりに彼の腕に包まれたとき、ブレイズがちよつと戸惑う素振りを見せたことが、パティスにはこの上なく嬉しかった。

普通の恋人同士のようにブレイズと共に過ごしていくこと。

それがパティスにとって、唯一無二の願い。

それなのに――。

はつきり言つてパティスは怒っていた。

どうしてブレイズはキスすらしてくれないのだろうか？

十年ぶりに再会したあの晩以来、彼は抱きしめてくれることはおろか、手だつて握ってくれない。

いや、きつと、髪の毛一本にだつて触れられてはいないはずだ。

仮にも女性である自分からブレイズに触れるだなんてこと、恥ずかしくて出来ない。

そんなことをしたらはしたない女の子だと思われてしまうかも知れないから。

だから我慢しているのに――。

ブレイズにとって、自分はどんな存在なのだろう？

「ブレイズの馬鹿……」

ソファにパタリとうつぶせると、パティスは出口の見えない迷宮

をさまよい始めた。

悶々とした状態で、何も羽織らずソファに突っ伏しているうちに眠ってしまったらしい。

肌寒さに目覚めると、パティスは小さなくしゃみをした。

その気配に、そばで眠っていた愛犬が指先に冷たい鼻を押し付けてくる。

「ナスター……？」

寝起きだからだろうか。少し頭がぼんやりしている。

愛犬の名を呼びながら、寒さにその体温を感じ取ろうと手を伸ばしてから、パティスは一人苦笑した。

茶色の毛に、赤い首輪がよく映えるこの愛犬は、実はブレイズの創り出した使い魔だ。

パティスが羊皮紙を折紙の要領で犬の形にしたものへ、ブレイズが息を吹き掛けて動けるようにした。元の素材が紙なため、ナスターに触れても温もりを感じることは出来ない。そのことを失念していたわけではないのだけれど。

「私ってば変ね」

照れ隠しにそう呟いてから、ナスターの頭を優しく撫でる。

長い間慣れ親しんできたはずの無機質の冷たさが、今日はやけに寒く感じられた。

小さく身震いすると、パティスは見るとはなしに部屋の中を見渡す。

ブレイズの住まいであるこの城は、壁はもちろん、床だって石造りだ。

この屋敷は外から見ると、ロマネスク調の城の様相を呈している。形もさることながら、素材もそんな感じなので、パツと見、要塞かと見紛うほどだ。

見た目だけでなく、ブレイズの外敵——主に吸血鬼である城主を

目の敵にしている町の人たち——から身を守るために張られた強固な結界に囲まれているので、実際この城は彼にとって、皆同然だと言えた。

そんな感じなので、電気やガス、それから水道なんて便利なものは一切通っていない。

明かりといえば、四角くくり貫かれた小さな穴から差し込む僅かばかりの月光と、燭台に灯る蠟燭の炎だけ。燃料はブレイズがどこから調達してくる薪が主で、水は庭に掘られた井戸から汲み上げていると言った有様だ。

パティスが寝起きしている一階にあるこの部屋は、かつてブレイズが雨などで外出出来ないときに寛ぐ第二の私室——リビング——だった。吸血鬼であるブレイズは、流水も太陽光と同じぐらい苦手なものだったから、雨降りの日には外出を控えている。

だから、だろうか。ベッドやソファに加えて、小さな暖炉も完備されているここは、他の部屋よりは快適に過ごせるようになっていく。

この城、一見したところ二階建てなのだが、天井が普通の家とは桁違いに高くなっているので、三階建て以上の高度がある。それで、床面積が広い部屋なんかは、輪をかけてだっ広く見えるのだ。

パティスがざっと数えただけでも、一階、二階合わせて三十近い部屋があった。

そんな大きな建物なのに、住んでいるのはブレイズとパティスの二人だけ。

厳密に言えば使い魔がナスターの他にもう一匹（？）存在しているのだが、それにしだって鳥のように宙を羽ばたく本なので、ナスター同様ペットのような存在だ。行動範囲も、自分たちとほぼ重なっている。無論彼らが使用人になり得ないのは言うまでもない。

それで、こんなに沢山の部屋数があるのに頻繁に使用するのはいくつかの部屋に限られていた。

殆どの部屋は物置のようになっていて、数点の家具がポツポツと置かれただけの、殺風景な有様だ。中には、そんな物たちに布が掛けられて、気持ちばかりの埃避けが施された部屋まであった。

手入れが行き届かないことをありありとかがわせるそれらの部屋は、埃っぽくてそのままでは居座ろうという気になれない。だからと言って、掃除しても使わない状態が続けばまた埃を被るのは目に見えていたから手を加える気にもなれなくて――。

そんなわけで、せめて自分たちが使っている空間ぐらいは、と限られた数部屋のみブレイズと話し合っては改善が続けている。

手入れすればするほどそれらの部屋以外の必要性がなくなっていくって……。

その繰り返しで悪循環になっている気がしなくもない。

ふと、窓から漏れ入る月光を見上げてパティスは溜め息をついた。「屋敷内全体っていうのは無理だろうから、せめてこの部屋の窓だけでももう少し機密性を高くしたいなあ」

むずむずする鼻をこすりながら、呟く。

何だか喉も少し痒いような気がするの、もしかして風邪？

それもこれも、全部あの窓が悪いのだ。

雨戸を閉めた状態でも、その隙間から光が差し込んでしまうこの部屋で、太陽光が命取りになるブレイズが朝を迎えることは不可能に近い。

光が漏れ入るのと同様、隙間風も容易く出入り出来てしまうあの窓は、パティスにとっても厄介だった。いくら暖炉がついていたって、密閉できない場所では、その効力は薄まってしまふのだから。

十月の外気は、夜半を過ぎると時として冷気を伴い部屋へと侵入してくる。

月が綺麗に見える夜というのは、とかく空気が冷えていることが多い。

綺麗な満月が浮かぶ今夜も、空気が澄んでいて、やっぱり温度が低めだった。

もしもこんな寒い晩、ブレイズとともに眠ることが出来たら幸せなのに。

ふとそんなことを思ってから、自分の寝起きしているベッドを見詰め、溜め息を落とす。

こんなに広い部屋なのに、ベッドは小さなシングルサイズ。

パティスは小柄なほうだけれど、このベッドではブレイズと一緒に眠るには役不足に思えた。

もちろん、キングサイズのベッドを置いたところであの窓を何とかしなければ一緒に寝起きだなんて夢のまた夢で……。

さつきから、思考がグルグル堂々巡りをしている気がする。これは、幼い頃から聡明で通っているパティスには珍しいことだ。

（何だか頭がぼんやりしているみたい……。本格的に風邪を疑ったほうがいいのかも？）

そんなことを思いながらも、頭は依然寝室やベッドのことから離れられずにいた。

その流れで、ふとブレイズの寝室を思い出して、ブルツと身震いをする。

頭がぼんやりしすぎていて、それが身体的な寒気からきたものなのか、精神的なものからきたものなのか、パティス自身分からなくなっていた。

少女の頃に一度、ブレイズに手を引かれて降りたことがあるそこは、見えない入り口に守られた地下だった。

今パティスが生活している上の階と違い、燭台が一つもない真の闇が支配する空間。

雑多な物たちが氾濫する地下室の片隅に、一箇所だけ周りに物が余り置かれていない空間があった。そこには、質素な棺桶がひとつあるきりで――。

それが、ブレイズの寢床だった。

吸血鬼といえは？と問えばすぐに連想出来てしまうような、余りにもお決まりのパターンに、驚くと同時に酷くガッカリしたのを、今でも鮮明に覚えている。

あそこでは、ブレイズと一緒に眠ることは出来ないと、幼いパティスにも容易に理解出来たからだ。

（そう言えばブレイズ、あとき私の稚拙な我が侘を聞いてくれたっけ）

そう思うと同時に、この部屋のソファに横たわった少女時代のパティスの手を、眠るまで握っていてくれたブレイズの姿が想起された。

吸血鬼は冷たい、という既成概念を覆すほど、ブレイズの手は温かくて心地良かったのを覚えている。

ふと昔のことに思いを馳せていたら、何となく照れ臭くなった。

「……って今はそんなこと考えてる場合じゃなくて……っ」

ブレイズがあ頃のように気安く触れてくれなくなったことを嘆いている最中だったはずだ。

そう思い出すと、ついさっきまでのくすぐったい、温かな照れを伴った心地よさが吹っ飛んでしまった。

「ブレイズの馬鹿……」

はからず、転寝する直前に呟いたのと同じセリフを口走るパティス。

馬鹿と言ってみたところで肝心の相手が居ないので話にならない。

「そっだ」

とりあえず、さっきから気になっているこの部屋の隙間風を緩和する方法を考えることにしよう。

気持치가建設的な方向に上向いたパティスは、少し思いを巡らせて、屋敷内に散乱する布ッ切れを集めて回ることにした。幸い、いたるところに、家財の埃避けに被せられた布があることを知ってい

る。

きつと数枚拝借してきたところで、元々布が掛かっていない物だ
って沢山あるんだから問題ないだろう。

「布を窓に張れば少しは違うはずだし」

問題は、どうやってあの窓に手を伸ばすか、だけれど、それはと
りあえず、布を集めた後で考えることにしよう。

そう思い至ると、パティスは少しふらつく足取りで寢室を後にし
た。

背後に、心配そうに付き従うナスターを引き連れて――。

今夜のように晴れた晩、ブレイズはいそいそと出掛けていった。
まう。

その行動は、まるでパティスを避けているように思えた。

「何処に行くの？」

問いかけるパティスに、ブレイズは少し困ったような笑みを浮かべて

「ちよつと、な？」

そう返すのが常になっていた。

そのたびにパティスがどんなに不安になるかなんてお構いなしの
その態度に、苛立ちと戸惑いが増していく。

燭台の薄明かりに照らされた寂しい廊下を、愛犬ナスターを引き
連れてホトホトと歩いていると、思い出したくないのに数時間前ブ
レイズを送り出した時のやりとりが蘇ってきた。

「ブレイズの鈍感……」

悲しくて思わずそう呟くと、背後を歩いていたナスターが指に鼻
先を押し付けてきた。

「……？」

その気配に足元を見遣ると、心配そうに顔を覗きこむ愛犬の視線
とぶつかった。

「ナスター……」

そういえばブレイズ、出かける際に使い魔であるナスターを伴っ
たことがない。

それは一人屋敷に取り残されるパティスのことをおもんばかりで
のことなのか、それとももっと別の意味があるのか、パティスには
分らない。

分らないけれど、今こうして自分の様子を伺っているナスター
からは不安そうな表情が見てとれた。

「心配かけてごめんね」

思わずしゃがみ込むと、ナスターの頭を撫でてやる。その所作に、嬉しそうに目を細めるナスター。

「……そっか」

そこでパティスは気付いた。

ナスターが一緒ならば屋敷の中にこもっている必要はないのだということに。

ブレイズばかりが出かけているのは何だかズルイ。

自分も、太陽の高い昼間は屋敷の外に出て一人で色々散策しているくせに、そのところは棚上げしてそんな風に思う。

「お散歩行こっか？」

少しふらふらするけれど、大したことはない。屋敷の中で穴を塞ぐ作業をするより、その方が気持ちの上向きがした。

「窓を塞ぐのなんて、何も今じゃなくても出来るんだし」

ブレイズ抜きで、闇の底のような夜の森を抜けるつもりは毛頭ない。

でも、ちょっと先の開けた野原に出るのくらい、ナスターと一緒になら大丈夫かな？

満月の夜、だっ広いあそこは月光を独り占めできる絶好のポイントなのだ。

そう思ったパティスは、今来た道を引き返して、自室に戻った。

壁に掛けられた、首輪と同色の真つ赤なリードを取ると、慣れた手つきでナスターに装着する。

愛犬の栗毛色の身体には、深紅の首輪とリードがよく映えた。

この色が、ブレイズの瞳の色——ピジョンブラッド——を意識した色だなんて、口が裂けても言うもんか。

ふとそんな風に強情なことを考えてから、おかしくて思わず笑ってしまう。

そんなパティスを、ナスターがきょとんとした目で見上げてきた。「私が……思ったことをちゃんと口に出して伝えないからいけない

のかも知れないね」

ナスターになら平気で言えてしまう本音が、どうしてブレイズ相手だと言えないんだろう。

「ブレイズが帰ってきたら寂しいって伝えよう。ちゃんと私を見て？って言うてみよう。もっともっと一緒に居たいって素直に口にしてみる……」

もしかしたら笑われたり、呆れられたりしてしまうかも知れないけれど。

ナスターの真っ直ぐな瞳をじっと見つめて、パティスは独り言のようにそう呟いた。

秋も深まった今、さすがに春のように原っぱ一面に野イチゴが、
という光景は見られなくなっていた。

「蛇、居ないよね？」

前を歩くナスターについて恐る恐る足を踏み出しながら、パティ
スが呟く。

幸い夜空に浮かんだ満月が、惜しみない月光を降り注がせてくれ
ているので視界は思いのほか開けている。

それでも草が生い茂った野原は、パティスにはちよっぴり怖かつ
た。

十年前、ブレイズに連れられてここを訪れたとき、気をつけて歩
かなければ毒蛇がいるぞ、とたしなめられたのを覚えているからだ。
あのときパティスはブレイズが吸血鬼だなんて知らなくて……。

空には今みたいにまん丸なお月様が浮かんでいた。

激情に任せて家出してみたものの、移動費だけで所持金を使い切
ってしまったあの日のパティス。

泊まる場所はおろか、食料さえ確保していなかった自分に、ブレ
イズが食べさせてくれたのがこの野イチゴだったのだ。

「ブレイズの足元に影が出来ていないって気付かされたときはビツ
クリしたっけ」

今宵も、自分の足元には色濃く影が落ちている。

でも、同じ月明かりの下、どこに居るのか分からないブレイズに
はないはずだ。

そう思ったら何だか切なくなった。

「ブレイズ……」

自分は吸血鬼なのだ、と明かしたあの日のブレイズは、とても寂
しそうな目をしていた。

それを思い出したのだ。

「どこにいるの？」

いつも、何も告げずにふらりと出て行ってしまふブレイズに、パティスは怒りを感じる以上に不安を覚えていた。

遠いあの日、自分は一人ぼっちなのだと悲しい目をしたブレイズは、もう過去の人なのかもしれない。

（ブレイズ、実はどこかにもっと素敵な相手を見つけていて、自分がいなくなっても寂しいなんて思ってくれないんじゃない？……？）

ふとそんなことを考えて、パティスは慌ててそれを否定した。

「……そんなはず、ないよね」

不吉な考えに、いつの間にか足が停まっていた。

引き綱の先を握るパティスが動かなくなったことに気付いたナスターが、近付いてきてパティスの手を舐める。

「ナスター」

温もりはなくても、こういう気遣いが堪らなく嬉しい。

「有難う」

ブレイズの使い魔であるナスターは、こんなにも優しい。だからブレイズだって。

ナスターの製作に、半分は自分の手も加わっていることはこの際考えないことにした。

その間も、ずっと気遣わしげに自分のことを見上げ続けていたナスターに、パティスはニコツと微笑んだ。

「心配かけてごめんね」

言って、ナスターの前にしゃがみ込もうとしたら、地面がぐらりと揺れた。

「あ、れ……？」

グルグルと回る世界の中、パティスは草のにおいと、降り注ぐ月光のほのかな明かりが混ざり合うのを感じた――。

身体の上に何かが乗っかっている。

重くはないけれど……ほんの少しだけ負荷が掛かっている感じ。

その違和感に引つ張られるようにして、パティスはゆっくりとまぶたを開いた。

「ここは……」

薄暗がり閉ざされていて、目が慣れてくるまで全ての輪郭がぼやけて見えただけ……どうやら自室のベッドに寝かされているらしい。

そこまで考えてから「あれ？」と思う。

（私、確か……）

記憶が正しければ、自分はさっきまで月光を浴びながら、ナスターとともに原っぱに立っていたはずなのだ。

それが、どうしてベッドになんて居るんだろう？

ふとそこまで考えて、頭に感じる湿った感触に額へ手をやれば、濡れたタオルが載せられていた――。

そこで初めて、キヨロキヨロと視線を彷徨わせてからハツとする。「ブレイズ……？」

喉が渴いていて声がか細く掠れてしまったけれど、その声は確かにベッドサイドでパティスの手を握ったまま眠りこけてしまっているブレイズの耳朵を震わせたようだ。

閉ざされていても思わずうつとり見入ってしまいそうになる、眉目秀麗な顔の、長い睫毛がゆっくりと揺れて……そうしてそれとは不釣り合いなほど激しい勢いで、ブレイズの目が開かれたのだから。いつ見ても吸い込まれてしまいそうな輝きを放つ深紅の瞳は、しかしそれを凝視する間をパティスに与えてはくれなかった。

目が開かれると同時に跳ね起きるようにして、ブレイズがパティスの顔を覗き込んだからだ。オマケにいきなり頬をムニツと摘ま

れて、パティスは思わず悲鳴を上げた。

「きゃー！　ちょ、何っ？　痛いっ！」

その、抗議の声を聴いて、ブレイズが安堵したように肩の力を抜く。

「パティス！　お前、どんだけ心配掛けりゃー気が済むんだよ！」

しかし、安心感とともに怒りが込み上げてきたのか、ブレイズは握っていたパティスの手を振り解くように投げ捨てると、そう言つてそっぽを向いてしまった。

驚いたのはパティスだ。

「あ、あの……。ねえ、ブレイズ？」

その怒りの原因が自分にあるらしいことは分かったけれど、現状がさっぱり把握出来なくて、どうしたらいいのか分からない。

でも、背を向けたブレイズがそのまま行ってしまうんじゃないかと思つたら、怖くなつて思わず彼を追うように身体を起こしてしまつていた。

途端、額に載せられていた濡れタオルがベッドから滑り落ちる。

あつと思つて手を伸ばしたら、思わぬ目眩に重心がぶれた。

「きゃっ」

「危ないっ！」

ベッドから落ちる！と思つた瞬間、振り返つたブレイズに抱き留められて、

「あんま、心配かけんなよ……！」

その言葉とともに抱き締められた。

それも、今までに経験したことがないくらい強い力で――。

その感触に、パティスは頭の芯までピリピリと痺れるような錯覚に陥る。

それが、嬉しさからばかりくるものではないと知つたのは、腕の力を緩めたブレイズの手が、自分の額に伸ばされてから。

「まだ、熱が高いな」

心配そうにそう呟くと、ブレイズはパティスの身体をベッドの上

にそつと押し倒した。

「え？ あ、あのっ……」

いきなり上に押し掛かるようにベッドへ押し倒されて、パティスは頬が一気に紅潮するのを感じた。

寝そべった折に、ブレイズの前髪がパティスの鼻先をくすぐって

……それだけでパティスの身体は硬直する。

（この距離と、この体勢は心臓に悪すぎよーっ！）

そんなことを思い、一人ドキドキするパティスとは裏腹に、ブレイズは思いの外アツサリと彼女の上から身体を離れた。

「急に起き上がったりするな。お前、三日も寝込んでたんだからな？」

しかし、さして間を空けずに告げられたその言葉を吟味すれば、ブレイズが自分の身を案じてくれていただけだと分かる。

そう、迂闊にもシチュエーションだけでときめいてしまったけれど、今の行動はこれといって他意はないものだったのだ。

「……ご、ごめんなさい」

とりあえず謝罪の言葉を口に載せてから、改めてブレイズの言葉を頭の中で反芻してみてもハツとする。

「あの、今、三日も……って」

言わなかった？ そう続けようとしたら、呆れ顔で睨まれた。

「そーだよ！ 三日も寝込んでたんだよ、お前は！」

体調が悪いくせにウロウロするからだ、とか何とか言い募るブレイズに、パティスは至極当然の疑問を投げかける。

「でも……あの、どうして私が倒れたって分かったの？」

倒れたのが野原で、だとすれば、あの時ブレイズは傍に居なかった。なのはどうして？

そう、問いかければ

「ナスターが一緒だっただろ」

いちいち聞くな、と言いたげな口調でブレイズが返す。

「ナスター……？」

説明されても今一ピンと来ないのは、熱のせいかしら？

ぼんやりとそんなことを思いながら熱に潤んだ瞳でブレイズを見詰めたら、途端そつぽを向かれてしまった。

まるで自分と視線を合わせないための格好の小道具を見つけたかのような雰囲気です元に落ちたタオルを拾い上げると、ブレイズはベッド近くのテーブルに向かった。テーブル上には、パティスが毎朝洗顔に愛用している陶器の洗面器が置かれていた。

そこへかめの中から新鮮な水を移すと、その中にタオルを浸しながらブレイズが言う。

「忘れたのか。ナスターは使い魔だ」

パティスの方に背中を向けた状態のままタオルを絞り終え、

「余計なことは気にせず寝とけ」

額に今、綺麗にしたばかりのタオルを載せて、突き放すような口調で会話に終止符を打つ。

そんなブレイズを見上げるようにしてナスターが尻尾を振っているのが布団越しにちらりと見えた。

ブレイズに自分の危機を知らせてくれたのがナスターなんだとすれば、お礼を言わなきゃ。そう思っただけで身体を起こしかけたら、その気配を察知したブレイズに睨まれる。

「ほら、目、つぶれ」

その視線に、仕方なく枕に頭を埋めると、

「頼むから心配かけてくれるな」

頬を撫でながら、聞き取れるか聞き取れないかの声量で、そう囁かれた。

目が覚めると夜だった――。

「……ん」

十分な休息は、随分と身体を軽くしてくれていた。

心地よく眠っていたため、うなされたりして余り寝返りを打つことがなかったのだろう。

落ちることなく額に載ったままの濡れタオルに手をやって、そんなことを思う。と、それがまだひんやりとしていることに気付いたパティスは、タオルを手に取り慌てて周りを見遣った。

薄暗がりの中、所々に灯されたランプの明かりで、ぼんやりと部屋の様子が視認できる。ずっと目を開けていたら、徐々に暗闇に慣れてきた目がしっかりと部屋の様子を伝えてきた。しかし、懸命に見回してみても、ブレイズの姿はどこにもなくて。

「ブレイズ……？」

試しに呼ばわってみたけれど案の定返事は返ってこなかった。

そのことにわかに不安になったパティスは、ベッド上にゆっくりと身体を起してみる。

さつきは、そうすることで慌てて飛んできたブレイズだったが、今はその気配がない。

（どこ……？）

ベッドに座ったことで上半身が布団から出てしまい肌寒さを感じたパティスは、ブルツと身震いをしてもう一度辺りの様子を窺った。と、どこからか人の話し声が聞こえてきて、パティスは落ち着かなくなってしまう。ベッドから抜け出した。

そんな彼女の足元へ、いつもなら真っ先に駆けつけてくるはずのナスターの姿がないことも、パティスの焦燥感をかきたてる。

壁際で、ハンガーに掛けて吊るされていたカーディガンを羽織ると、パティスは声のするほうへそっと足を向けた。

声はどうやら正面玄関の方から聞こえてくるらしい。

何となく見つかつてはいけない気がして、忍び足で歩くパティスの目に、重い木戸をほんの少しだけ押し開けて誰かと話し込んでいるブレイズの後姿が飛び込んできた。

彼のすぐ横に、訪問者を牽制するようにナスターの姿も見えた。足音を潜めて近づくパティスに、しかしナスターは気付いたらしい。ゆつくりとこちらを振り返って、腰を上げようとしたのへ、パティスは慌てて唇に人差し指を当てて「シーっ」とやって見せた。そんな、パティスの内緒だよ？のポーズを察して、何事もなかったかのようにナスターが扉のほうへ向き直ってくれたのを確認してパティスは安堵する。

どうやら幸いにしてブレイズも扉のほうへ気を取られていて今のナスターの動きには気付かなかったようだ。そのことにホッとしたのと同時に、彼の会話の相手が気になり始めた。

（誰？）

パティスからはブレイズの背中の中の陰になっていて、訪問者の姿が見えない。

「——お前、何でこんなトコまで来るんだよ？」

パティスのことを気にしてか、やや低めのトーンでブレイズが言う。それに対して、訪問者のほうはいっかな遠慮した風もなく良く通る声で答えた。

「だってブレイズ、何も言わずに来なくなっちゃうんだもん。私、心配したのよ？」

その声は、どう聴いても女性のもので——。

その声を聴いた途端、思わずパティスは玄関へ向かって駆け出していた。

「ブレイズ！」

駆け出すと同時に半ば叫ぶように呼びかけていた。

「パティ、ス……っ」

そんなパティスのほうを、瞬間凍りついたような表情を浮かべたブレイズが振り返る。

「起きたのか？」

次いでそう問い掛けてきた声がどこか咎めるように聞こえたのはパティスの気のせいだろうか？

言つと同時に一歩前に出たブレイズの振る舞いが、戸外の女性を隠す仕草のように見えて、パティスは胸の奥がチクリと痛むのを感じた。やはり眼前の女性と面談しているシーンは、自分には見られなくなつたのだろうか？

でも、そう思つたら逆に問い質してみたくなつた。

「……あの、そちらは？」

わざとブレイズをかわすように彼の背後を見遣ると、金髪碧眼の可愛い女性と目が合った。

パティスの、赤みがかった緩やかなウェーブを描く猫毛とは違い、一本芯が通つたかのように真っ直ぐなストレートが目にも優しい。蠟燭の灯りしかないこの屋敷にあつても、彼女の髪だけはまるでお月様みたいに光をまとい輝いて見えた。

その髪が、肩を滑り落ちるようにサラリと流れるさまに見惚れていたら、どうやら軽く会釈をされたらしい。

（お人形さんみたい）

それが、パティスが眼前の女性に対して抱いた第一印象。

そのお人形さんが、スカートの端をちょこつと摘んで持ち上げながら口角を引き上げる様はとても絵になっていた。艶やかな漆黒の髪を持つブレイズと並んでいると対照的に見えるけれど、それが逆

にお似合いだと思えてしまうほど――。

「こんにちは、パティスさん。お噂は彼からかねがね」

そこまで言って、一旦言葉を区切ると、彼女は咎めるようにブレイズを睨んでから続けた。

「どうやら私の話は彼、貴方にはしてくれてないみたいね。私の名前はシルバミ」

パティスが彼女の美貌に圧倒されて硬直している間に、あちらは勝手に自己紹介を済ませてしまった。その言葉の端々に、何故かトゲが含まれているように感じられたのはパティスの気のせいだろうか？

「……あの、ブレイズとは」

魅了されるように彼女のブルーの瞳を見つめていたパティスは、しかし語られた内容に、ブレイズとの関係が一切明示されなかったことに不安を覚えてしまう。ついでに言えば、彼女がブレイズを「彼」と称するたびにそこに言葉以上の親しさを感じてしまつて気持ちが悪ざわと落ち着かなかったのだ。

「俺とシルバミとはただの友達だ」

その、パティスの質問に半ば強引に割り込むようにブレイズが答える。まるで、シルバミに語らせたくないようなその態度に、パティスの中で不安が増長される。

「ブレイズには聞いてないわ!」

それで思わず非難めいた口調で彼を責めてしまった。

そんなパティスをクスツと微笑つてから、シルバミが一步前に出る。

「そうね。私と彼とは……友達というより寧ろこういうことが出来る関係、って言うべきかしら？」

言つと同時にほんの少し背伸びをして、シルバミがブレイズにキスをした。

瞬間頭の中が真っ白になった。いや、正確に言うと真っ黒になった、というほうが正しいかもしれない。

目の前で繰り広げられる光景から受けた余りの衝撃に、パティスは瞳を見開いて呆然と立ち尽くす。

寸の間そうしていたはずだったけれど、気が付いたら走り出していた。

とにかくその場から離れることだけを考えて――。

館の出口はすぐそこだったけれど、木戸を塞ぐようにブレイズとシルバミが立っていたから……だからパティスは彼らが居るのとは真逆の方向へ向かって駆けたのだ。

「……パティス！」

突如駆け出したパティスに気付いたらしいブレイズの声が背後から追い掛けてきたけれど、振り返るのが怖くて無我夢中で走った。そうして辿り着いたのは結局さっきまでいた自室で――。

（バカ、バカ！ 何で逃げちゃうのよ！）

部屋に飛び込むなり扉に鍵を掛けてその場に滑り落ちるようにへたり込んでから、涙に霞む目を必死で拭う。

そうこうしている内に、ドア越しに固い石畳を甲高い靴音を立てながら駆け寄ってくる足音が聞こえてきた。

次いで「パティス！」と呼ばわる声と一緒に背中^{かぶり}に当たる扉を激しくノックする音がして……。感じたくないのにブレイズの気配を、板一枚隔てた向こうに嫌というほど感じさせられてパティスは嫌々をするように頭を振った。

本当は、扉越しでも構わないから、どういことなの？と彼に真意を問いたい。

でも、その一方で、パティスはそれを聞くのがとても怖いとも感じていて……。結果、ブレイズ^の声を耳に入れること自体恐れるよ

うに強く背中を扉に押し付けて耳を塞いだ。

「こら、パティス！　ここ、開けるよ！」

でも、外のブレイズはそんなパティスの気持ちなんて全然解さな
いみたいに強い口調で扉を叩く。それだけならまだしも、ガチャガ
チャとドアノブを回す音までし始めて、パティスは思わず必死にな
ってノブを押さえた。

そのぐらい、パティスはブレイズと顔を合わせたくなかったのだ。

「……無駄よ、ブレイズ」

でも、ノブを押さえたことで塞ぐことが出来なくなってしまった
パティスの耳は、聞きたくないのにシルバミの声を拾ってしまう。

「って言うより……あなた、彼女に何も言ってなかったの？」

聞きたくない、と思うのに耳は扉越しの声に集中してしまう。

「……言えるわけねえだろっ！」

シルバミが半ば呆れたような口調で問えば、ブレイズが吐き出す
ようにそう答えた。

それは……結局自分と彼女との関係をパティスに言えるわけない、
と言っているのと一緒にではないだろうか。

そう思ったパティスは、ゆっくりとドアから離れ、ベッドに突っ
伏して布団をかぶった。

（……私、どうすればいいの？）

泣きじゃくりながら思うのは、ここを出るべきか否か、というこ
とだった――。

一人、布団に突っ伏して泣いている間にどうやら泣きつかれて眠ってしまったらしい。

上のほうにある窓の――正確には雨戸の――隙間から漏れ入るほつそりとした光に目を^{すが}眇めると、殆ど無意識に「ブレイズが火傷しちゃう！」と思って慌てて飛び起きた。そうしてから今の現状を思い出し、不意に悲しくなった。

体調を崩して倒れる前、パティスはこの部屋の窓の密閉率を今よりもっと高くしようと思っていた。

ブレイズと一緒にこの部屋で寝起きできればいいな、と夢見て――。

（ブレイズ……）

日が高くなったのだから当然というべきか。意識を手放す前には布団を被っていても廊下にいるブレイズたちの気配を感じていたけれど、今はひっそりと静まり返っている。

恐る恐るベッドから抜け出すと、パティスは忍び足でドアに近付いてそこへ耳を押し当てた。が、案の定何の音も聞こえなくて――。まるで世界に一人取り残されたような恐怖に陥ったパティスは、音を立てないように細心の注意を払いながら鍵を開けると、そっと扉を押し開けた。

少しずつ大きくしていった隙間からゆっくりと顔を覗け、首を左右に巡らせてみたけれど当然と言うべきか。人影は見当たらない。薄暗く伸びる無機質極まりない石畳の回廊を見て、一層悲しい気持ちになった。

と、不意にふわりと足へ当たった柔らかな感触に、パティスはゆっくりと視線を足元へ落とす。

「……ナスター」

見れば、戸口のところに大人しくお座りをしている愛犬の姿があ

った。

いつもなら一も二もなく飛びついてくるはずのナスターが、まるで別の犬になったみたいに大人しくしていることに、彼なりの優しさを感じた。それに気付いたパティスは思わずその場にしゃがみ込んで、その存在を確かめるようにギュツとナスターを抱きしめた。

雨戸は閉ざされているけれど所々陽光が漏れ入る廊下を、ナスターを伴って歩きながらパティスはフル回転でこれからなすべきことを考えていた。

それである結論に達すると、パティスは迷いなく裏庭に続く入口がある部屋へと足を向けた。

本当は玄関を通ったほうが外は近いけれど、昨夜あんなシーンを覚えてしまった場所を通るのは精神的に無理だったから――。

裏庭へと続く戸口の前で立ち止まると、もう一度しゃがみ込んで足元にお座りをするナスターを思い切り抱きしめてから、その耳元で「ごめんね」と呟く。

その間、やはりパティスの言動を黙って見詰めるだけだったナスターから離れてそっと立ち上がると、パティスは意を決したように後ずさった。

その動きに自分も立ち上がろうとしたナスターを手で制すると、パティスはそのまま二歩、三歩と下がって後ろ手に扉を開けると裏庭へ出た。途端、パティスを包み込んだ日差しに怯^{ひる}んでナスターがたたらを踏む。その隙に素早く扉を閉ざすと、パティスはそこにもたれかかってギュツと目をつぶった。

そんなパティスの耳に、中からカリカリと扉を掻く音が聞こえてきて……。

（ごめんね、ナスター）

それは今から取る行動に対しての、精一杯の気持ちが入められた

謝罪だった。

陽光が燦々と降り注ぐ庭を抜け、パティスは無言で歩を進めた。庭にはその周囲を取り囲むように薔薇を絡ませた垣根があつて……。戸こそ存在していないけれど、二箇所に分けられた薔薇の門を潜り抜ければ敷地の外だと言ふことが分かる。

いつもならナスターを伴つてしか出たことのない館の外は、それだけでパティスを緊張させた。

それと同時にいつかブレイズが話してくれた、「結界」という言葉が脳裏を過ぎる。

（やっぱりこのまま出ちゃったら二度と館へは辿り着けなくなっちゃうのかな……）

そうするためにナスターを置き去りにしてきたのに、改めて考えると足取りが重くなった。

薔薇の門の真下で一度立ち止まると、振り返つて館を仰ぎ見る。ロマネスク様式の建物は、全体が苔生して見えて陽光の下でもどこか影を落としているように見えた。壁をくり貫いたように点在する小さな窓は、およそその内部に生き物を住まわせているようには見えない。それでも中にブレイズがいることを思えば、自然心の奥底が温かくなるのは何故だろう。

今、出てきたばかりの建物を見ると、自然涙が溢れてきた。それが頬を伝わないうちに館から視線を逸らすと、パティスは思い切つて足を踏み出した。

それで結局、こんなことになっていたりする。
（どうしよう……）

まだ自分が幼かった頃、ブレイズに導かれて彼の館を訪れた際、

周囲に存在している森が怖く感じられたことを思い出す。

人一人ぐらい容易に飲み込んでしまえそうな森――。

そう思ったのは紛れもなくパティス自身だったはずなのに。

どうしてナスター抜きでここを抜けられるだなんて思ってしまったんだろう。

パティスは、当初の目論見通り、途中で気持ちがあくじけそうになっても、目には見えない結界に阻まれて、ブレイズの館を臨むことは二度と出来なかった。

それは、薔薇の門を潜り抜けた瞬間に始まって――。

門を通り抜けると同時に嘘みたい視界から姿を消してしまった館に、パティスは戸惑いを覚えた。今までナスターと一緒にそんなことは起こらなかったのに。

それで、感覚を頼りに数歩後退したみたパティスだったけれど、そうしたところで戻るはずの館へ辿り着くことは適わなくて。

結局、パティスは前に進むしかないのだ、と改めて思い知らされた。

でも、一時間ばかり歩いた辺りで、森を抜けて街へ戻ることも出来なくなってしまったことに気付いたパティスは、全くもって計算外のその事態に泣きなくなった。

それでも気力を振り絞って数時間歩き回ってみたけれど、事態は一向に好転しなかった。

心細さに耐え切れなくなつて、へたり込むように近くの大木に身を持たせ掛けると、疲れ切った身体は休息を求めてその場に張り付いてしまった。

座り込んでぼんやりと上空を眺めれば、森の中にいるから、だけではない暗さがパティスを包み込もうとしているのが分かった。

（日が……暮れかけてる……？）

こんな森の中で夜を迎えると思うと怖くて堪らなかった。

「ブレイズ……」

彼に、別の相手が出来たと思ったからこそこうして館を出てきた

はずなのに……こんなときでも思い出すのは彼のことばかりで。

「逢いたいよ……」

声に出して呟けば、その思いは溢れ出して止まらなくなった。

あちこち枝に引掛けて破いたり、ほつれたりさせてしまったスカートは、そこかしこに泥が付いて汚れていた。そこへ顔を埋めて肩を揺らして泣いていたら

「見つけた……っ！」

という声と共に抱きしめられていた。

驚いて顔を上げると、暗色のフードにすっぽり頭から覆われた男がいて――。それは傍らにナスターが付き従っていたことと、その聞き慣れた声音から、辛うじて「ブレイズだ」と分かる、そんな有様だった。

「ブレ、イズ……？」

いつもとは明らかに違う彼の装束に戸惑い、自分が置かれた状況が即座に飲み込めなかったパティスは、確かめるように恐る恐る彼の名を呼んだ。……と、それに応える代わりに身体に回された腕に力が込められる。

「バカ……。なんでこんな無茶なことを……」

少し考えれば森に取り込まれて迷子になることくらい分かっただろう。吐き捨てるようにそう呟いたブレイズに、パティスは目を瞪る。

「だつて……！」

言いたいことが山ほどあって……。ありすぎてどう言ったら良いか戸惑ってしまった。

それで、とりあえず勢いのままにそこまで告げたところで、パティスはブレイズの皮手袋に覆われた指に、唇をそつと触れられた。たったそれだけのことなのに、パティスは言葉を飲み込まずにはいられなくなる。

「……すまん。今のは八つ当たりだ。悪いのはお前じゃねえんだ。それは……分かってるから……」

そうして耳元で囁くように告げられた言葉に、パティスは何も言えなくなった。

「すまん……」

パティスの髪に顔をうずめたまま、彼女の耳元でブレイズが呟く。その謝罪が、前の言葉を引き継いでのものだと思ったパティスは、ゆるゆると首を横に振った。

「私こそ……勝手なことをしてごめんなさい」

ブレイズの気持ちが例え自分以外の人に向いてしまったのだとしても……ちゃんと彼と話をしてから立ち去るべきだった。

そう続けようとしたら、力ない声で「……そうじゃない」と言われた。その言葉の意味を測りかねたパティスは、ブレイズから少し身体を放して彼の顔を覗き込んだ。

途端、パティスは目を睜らずにはいられなくなった。

「ブレイズ、どうしたの!？」

明らかに体調が悪いことを物語るように、苦悶の表情に歪められた彼の顔を見て、パティスは愕然とする。

そこでハツとしたように上空を仰ぎ見て、悟った。暗い森の中にいて失念していたけれど、木々の隙間を縫うように広がる空の様子から、まだ陽が完全に落ちてはいないことを――。

だからいつもはしないようなこんな重装備で彼はここへやってきたのだ。

パティスは吸血鬼ではないから、その苦痛がどれほどのものか実際には分からなかったけれど、恐らく今ブレイズは全身を焼かれるような激痛にさいなまれているんだ、と思った。

そう思っただけならば、所々服の切れ目から覗くブレイズの皮膚は赤く焼け爛れたようになっていた。

その、余りに痛そうな惨状に、パティスは思わずブレイズを太陽から庇うように彼の上に覆いかぶさっていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……!」

それ以外、何と言ったらしいのか分からなくて……うわ言のように謝り続けるパティスに、計らずも彼女の下敷きになってしまったブレイズが苦笑する。

「大丈夫だよ。こんな、すぐに治る」

そこまで言って、パティスの泣き濡れた頬に優しく手を触れると、
「それよりお前は怪我してないか？」

着ている物の、あちこちが破れていたり泥まみれになって汚れた
りしているけれどお前は大丈夫なのか？と問うてくる優しい声に、
パティスは必死で首を縦に振った。

「大、丈夫……」

しゃくりあげるように何とか一言そう言ったら、ブレイズがホッ
としたように息を吐いた。

「……良かった」

火傷だらけのくせに自分のことばかり気遣うブレイズに、パティ
スは胸を締め付けられるような思いに駆られる。

（やっぱり私はこの人が好き！）

それは、どんなに封じ込めようとしても押さえきれない感情で。
気が付くと、パティスはブレイズの頬に自分のそれを寄せるように
して抱きついていた。

「私、ブレイズが大好きよ……！」

例え、ブレイズの心に別の女性ひとが居たとしても――。

今までは、きっと言わなくても彼は気付いていると思っていたか
ら口には出さずにいた気持ち。

でも、改めてそう声に出してみると、本当にそうなのだ、という
実感が湧いてきた。

そして、それは彼女の告白を聞いたブレイズも同じだったみたい
で――。

「……っ」

目を見開いてどきまぎするブレイズを見て、パティスは何だか可
笑しくなった。

「どうしてそこで貴方が照れるの？」

告白したのは私で……だから照れなければならないのは自分のほうなはずなのに。そう言って苦笑したら、「いや……」と曖昧にぼかされた。

「パティス、悪いんだけど……その、ちょっと……離れてくれないか？」

そうして寸の間あけて告げられたのはそんな言葉で。

パティスはハッとして彼から離れた。

「ご、ごめんなさいっ」

そういえば自分の気持ちが高ぶってしまっただけですっかり失念していたけれど、ブレイズには今、シルバミという彼女がいたのだ。

自分のバカさ加減がホトホト嫌になる。

それでもブレイズを陽光に晒すのだけは避けたくて、彼の上に自分の影を落とすように覆いかぶさったままの状態は維持し続けた。

「ごめんね。陽が完全に落ちるまで……このぐらいの距離は許してね」

マトモにブレイズの顔を見ることが出来なくて、視線を逸らしがちにそう告げたら、泣きたくなかないのに涙が一筋頬を伝った。

それを悟られるのが嫌で余計にブレイズのほうへ顔が向けられなくなる。

と、急に彼の両サイドに付いていた両腕を取られ、パティスは彼の上に倒れこむ形で抱き寄せられた。

「バカ。泣くな……」

ギュッとパティスを抱きしめてブレイズが言う。

誰のせいで泣いているの？ 理不尽とも取れるブレイズの言葉に、彼の胸に収まったままパティスはぼんやりとそんなことを考える。

「お前、勘違いしてそうだから正直言うけど……余り近付かれると今の俺は抑えが利きそうにねえんだよ」

別にお前がくっつくのが嫌で離れろと言ったわけじゃない。

次いでそんな風に付け足したブレイズに、パティスは一瞬彼が何を言っているのか分からなかった。それで、思わず彼の表情を確認しようとして身じろいだら「見るな」と頭を押さえられた。

何だか分からないけれど、どうやらブレイズは今、自分には見られたくないような表情かおをしているらしい。そのことが何だか可笑しくて、パティスは思わず噴出してしまった。

「笑うなよ」

肩を震わせるパティスに、ブレイズが憮然とした声音でそう告げる。

「なあ、パティス。さっき言おうとして言いそびれたんだけどな」
続けて声の調子を変えたブレイズは、かしこまった口調で「少し血を飲ませてくれないか？」と問いかけてきた。そうすれば、回復が早まってすぐに動けるようになるのだ、と。

そこまで言うてから、ブレイズは「すまん……」と呟くようにそう付け加えた。どうやら先ほどの「すまん……」も、これを切り出すための前振りだったらしい。

そう気付いたパティスは、ブレイズのそんな不器用なところも含めて本当に愛しいと思ってしまった。でも、先ほどの教訓を生かして気持ちを落ち着けるために一度、深呼吸をする。

「あ。でも……やっぱ無理なら別に……」

その間を拒絶と取ったのか、慌ててそう言い募ろうとするブレイズの唇に人差し指を当てて彼の言葉を制すと、パティスは

「勿論、OKよ？」

につこり笑ってそう告げた。

吐息が首にかかる。

くすぐったいけど何となく心地好いその感触に、パティスはもういいか分からなくて身じろぎをした。途端、腰に回されたブレイズの腕に力が込められて、動きを封じられてしまう。

気が付けば、陽は西の彼方に没し辺りは一面闇に包まれていた。それに気付いたからだろう。

「もうお前の陰は必要ない」

そうブレイズに促されて、二人は身を起こした。そうしてから、樹の幹に寄りかかるようにして座り直したブレイズを背にして座らされたパティスは、背後から自分の腰を抱くようにブレイズの左腕が回ってきたときには本当にびっくりした。

今はその腕に動きを封じられている。

そのことを意識すると、どうしようもなくドキドキした。ましてや今、彼の顔は耳元すぐ近くにある。

ブレイズは直接自分の首筋に唇を寄せる気だろうか？

そんなことを考えたら恥ずかしくて、頬に朱が差すのを感じずにはいられなかった。

「緊張すんなよ」

そんなパティスの心情を察したのか、彼女の耳元でブレイズが囁く。その呼気すら刺激になって、パティスは思わず首をすくめた。

「パティス、怖いんやらやっぱ……」

自分が余りに過剰な反応をしたから、ブレイズが躊躇う羽目になった。

こうしてブレイズの気配をすぐ傍に感じてパティスの身体が強張ってしまったのは、別に今から為されようとする行為が怖かったからじゃない。

それよりも「止めよう」と言われることのほうが何倍も恐ろしい

のに、このままではブレイズにそう言わせてしまふ。

それがイヤで、パティスは彼の言葉を制するように「大丈夫！」と宣言してしまった。

「ホントに？」

無理してないか？と言外に含ませるブレイズに、こくん……と頷いて見せると、ややあつて彼が納得したように再度パティスの首筋に顔を寄せてきた。その際、パティスの首元を流れるふわふわの猫毛を、空いた方の手で優しく避けたその気配さえ、パティスには強烈で……。触れられたところを中心に何とも言えないざわざわとした気持ち湧き上がってきて、パティスは思わず声を上げそうになる。

「んっ……！」

その声を何とか喉の奥で堪えると、反動で身体に力が入ってしまった。

「痛くしねえから安心しろ」

それを萎縮と取ったのか呟くようにそう言つて、パティスの首筋に唇を触れさせるブレイズ。——と同時に一瞬だけチクツとした気がしたけれど、それは本当に寸の間のこと、パティスにはその感覚すら幻だったのではないかと思えてしまったほどだ。

恍惚の時間はそれゆえに無限に思えたし、またあつという間にも感じられた。

傷口に直接触れるのではなく、そこから伝う血を舐め取るようにブレイズの舌が這う感触に、パティスはぼんやりと身を委ねた。

- 12 - (後書き)

折角の吸血シーンですし、ちょっとだけ艶めいたシーンにしたかったんですがサラリといてしまいました… or z
はう。

精神的にかなりのダメージを受けましてしばらくお休みさせていた
だいております。

回復し次第更新していくつもりですので気長にお待ち頂ければ幸いです。

迂闊だった。

ブレイズの舌が首筋を這う、何とも甘露な感触に身を委ねているうちに、パティスは気を失ってしまったらしい。

いつ抜けられるとも分からぬ森の中を、一人不安と闘いながら彷徨い続けた精神は思いの他ダメージを受けていたようだ。ましてや日没がすぐそこ、と迫った状態のなか、力尽きてしまったのだからパティスの心が追い詰められていたのにも頷ける。

目を開くと、真っ先に見慣れた部屋の天井が視界に飛び込んできた。それを見て思わず安堵の吐息が漏れる。

と同時に次第にクリアになってゆく意識が、自分をここ——自室のベッド——へ運んでくれた者の存在を喚起させた。

「ブレイズ……？」

彼がまだ傍に居てくれているかもしれない、と淡い期待を抱いて呼びかけたけれど、返事はなかった。

しかし部屋の暗さから察するに、今がブレイズの活動時間の夜であることを悟ったパティスは、ベッドに横たえていた身体をそっと起こした。

（大丈夫。フラフラしない……）

熱に浮かされて寝込んだときを鑑みて、自分がふらついたりしないかと警戒したけれど、どうやらその心配はなさそうだ。

そう思い、ホッとしたと同時に首筋に違和感を感じたパティスは、思わずそこへ手をやった。それで自分の首にぐるりと包帯が巻かれていることを知って、苦笑交じりに「……大袈裟なんだから」と呟かずにはいらなかった。

傷口はほんの小さな穴ふただけだったはずだ。それなのにこの所業。

何故か普段はクールに振舞っているくせに、パティスが怪我をしたりすると妙に大騒ぎするところがあるブレイズのことを思い出し、自然口元がほころぶ。

そういえばブレイズの火傷は大丈夫だろうか？

途端、自分よりはるかに満身創痍の様相を呈していたブレイズのことを思い出し、居ても立っても居られなくなる。逸る気持ちを抑えながらベッドから下り立つと、微風と共にふわりと足に柔らかなものが触れた。

「ナスター」

置いて行かれたことを拗ねているのか、いつものように千切れんばかりに尻尾を振って飛びついてくることはなかったけれど、そっぽを向いたままの状態でも微かに彼の尻尾が揺れているのが分かる。「ごめんね」

呼びかけても尚もこちらを向こうとしない愛犬の頭をそつと撫でながら謝罪の言葉を呟くと、我慢できなくなったのか、いつものようにナスターが飛び掛ってきた。

一応、こうなることは予想して構えてはいたけれど、やはり相手が大き過ぎた。

ナスターに押し倒されるようにベッド下に敷かれたラグの上に倒れたパティスは、顔中を彼に嘗め回された。

「や、ちよつと、やめっ……」

じたばたともがきながらナスターを制してみたけれど余り効果はなくて――。

まるでそうすることが自分を置いていったパティスへの仕返しだと言わんばかりに、いつもに増して聞き分けの悪いナスターに、パティスは半ば諦めモードになった。

「楽しそうね。……それに……とっても元気そう」

いつからそこにいたのだろう？

突然投げかけられた銀鈴を転がすような声音に慌てて視線を上げ

ると、戸口に苦笑を浮かべたシルバミが立っていた――。

思わぬ来訪者に、慌ててナスターを跳ね除けて飛び起きると、パティスはめくれたスカートを直した。

「そんなに慌てなくても……」

苦笑を浮かべながら言われても、恥ずかしいものは恥ずかしい。無様な格好を恋敵に見られたことが悔しくて、パティスは思わずうつむいてしまう。

「ごめんなさいね。ちゃんと声は掛けたのよ？」

それを見て、申し訳なさそうにシルバミが言う。

恐らくはそうなんだろう。

ナスターに気を取られて、自分が聞き取れなかっただけ。いや、もしかすると……シルバミはもつと前に自分に声を掛けていたのかも知れない。

「いつ……？」

それで、思わずそう問い掛けてしまった。

「ん？ えっと……貴方が笑顔で首筋を触っていたあたり……？」

つまりは……目覚めてほぼすぐに、ということだ。そのときの自分は、確実にブレイズのことを考えていた。それで百面相のように笑ったり心配顔になったりと慌しく表情を変化させていたのだ。

そう思うと、何だかとても恥ずかしくなった。

「ごめんなさいね、本当に。でも……これで貴方も私と同じになった、ってことよね？」

意味深に微笑みながら歩み寄ってくるシルバミを見て、何だか解らないけれど身体が強張った。

（怖い……）

その目に見据えられると何故だか目が離せなくなる。そのくせ頭の中では「早く目を逸らせ」と警鐘が鳴っていた。

そんなパティスの気持ちを一いち早く察したのだろう。ナスターが、

シルバミとパティスとの間にスツと割り込んだ。

それで、一瞬彼女の目の呪縛から逃れることが出来たパティスは、慌てて視線を足元へと落とす。

「――あら？」

そんなパティスを見て、シルバミが不思議で堪らないという声を出した。

「貴方、ブレイズに血をあげたんじゃないの？」

そう言っただけでパティスの手を取った彼女の目からは、先ほどの妖艶な光は消えていて。

「え？ あげた、けど……」

それが何だと言っただろう。

つい今し方感じた恐怖が嘘のように消え去っていることに戸惑いを覚えつつも、パティスはそう問わずにはいらなかった。

「そう、よ、ねえ？ だって首に包帯が巻いてあるのってそういうことでしょう？ でも……だったら何で……？」

困惑しているのはパティスだけではないらしい。

しきりに首をひねりながらパティスの目を覗き込んでいたシルバミは、不意に興味を失ったように彼女から離れた。

「もう、ブレイズったら何考えてるのかサッパリ分かんない！」

そうして一言そう吐き捨てると、パティスを残して足早に部屋を出て行ってしまった。

続く

- 14 - (後書き)

更新、遅くなっていました(><)。

何とか気持ちの整理がついてきたので書き進めてみることにしました。

今度こそ、せめて月1のペースで更新していけたらな、と思っています。

「何なの、一体……？」

一番訳が分からないのは自分なのに、とパティスは思った。

一人ブツブツ呟きながら部屋を出て行くシルバミの後姿を呆然と見送りながら、思わずそう口に出してしまったのも仕方ないはずだ。
「……ねえ、ちよつと待って！」

やはり、どうしても納得がいかないパティスは、ドアが閉まり切る寸前、彼女の後を追って部屋を飛び出していた。けれど、そんなパティスの目に映ったのは、角を曲がって消えた、彼女のドレスの裾部分だけで――。

（もう！ シルバミっては何て足が早いの！）

一瞬そう考えて、それにしたって妙だな、と思う。いくら俊足だからって、優に五メートルは先にある曲がり角までこんな一瞬で行き着けるだろうか。

「ねえ、ちよつと待って！」

それでも慌ててそう呼び掛けると、パティスはナスターを伴って暗い廊下を駆け出していた。

廊下の両サイドには等間隔で燭台が設けられていた。しかし広い窓がない構造のこの屋敷内は、どこもかしこもパティスには暗すぎた。

お陰で平衡感覚を失い転びかけたパティスは、寸でのところで前から伸びてきた手に支えられる。

「大丈夫か？」

続いて降り注いできた声に顔を上げれば、そこにはブレイズが立っていた。

「ブレ、イズ……？」

自分はシルバミを追いかけているはずだったのにどうしてブレイズが？

そう気付いてそつと視線を彷徨わせれば、二人の様子を面白そうに目を細めて見守るシルバミの姿があった。

「あ、あの……ご、ごめんなさいっ！」

彼女の姿を認めた途端、思わず謝罪を述べてブレイズから離れると、パティスは急いで乱れた服を正していた。転びかけた弾みでまたしてもほんの少し、スカートの裾がめくれ上がっていた。

いつもいつも、シルバミにこんな風に恥ずかしいところばかりを見られてしまうことが悔しい。

こんなに悔しいと思っているのに……どうして自分は彼女と戦う前から不戦敗の気分なんだろう。

そこでチラリと前に立つブレイズを盗み見てから、パティスは泣きたい気持ちに駆られた。

（私だつてこんなに貴方のことが好きなのに）

どんなに強く想っていても、ブレイズの心にいるのは自分ではない。そのことを思い知ってしまったから……だからこんなにも胸が張り裂けそうに苦しいのだ。

「パティス？」

なのに何だつてブレイズはこんなに鈍感なんだろう？

悔しさと悲しさで零れ落ちそうになる涙を必死に堪えてうつむいたパティスの顔を、ブレイズが心配そうに覗き込んでくる。

「おい！ まさかどつか打ったのか？」

転びかけた拍子に痛い思いをしたんじゃないか？と心配するブレイズに、パティスは痛いのは身体じゃないわ、と心の中で叫んだ。

「うつん、大丈夫」

どこも怪我なんてしてないから。まともに彼の顔を見ることが出来なくて、言いながら身体の向きを変えるパティス。そんな情けない自分を、ブレイズの心を手にしたシルバミに見られていると思うと、居た堪れなくなった。

「ごめんなさい。私、やっぱりまだ疲れてるみたい……」

言つてそのまま立ち去ろうと一歩踏み出したら、有無を言わせぬ

力でブレイズに腕を掴まれた。

「おい、パティス！ お前、全然大丈夫なんかじゃねーだろ！」

こういうときだけどうして勘がいいんだろ。いつもは物凄い鈍感なくせに……。

腕を掴まれた弾みで堪えていた涙が一適床に落ちた。足元で弾けたその雫にだけは、どうか気付かれていませんように。

せめてシルバミにだけは泣いているところを悟られたくなくて、彼女から顔を背けるようにうつむくと、途端、ふふっという笑い声が聞こえてきた。

それは、今まで微笑を浮かべて自分たちを見詰めていたシルバミの、宣戦布告のように感じられた。

「ねえ、ブレイズ。いつまで彼女に勘違いさせておくつもり？」

シルバミの微かな笑い声を聞いて、最初パティスはそれを宣戦布告のように感じた。でも、次いで聞こえてきた溜め息交じりの、子供をあやすような声音に「おや？」と思う。

「……どういう意味だよ？」

そんなシルバミに、掴んでいたパティスの手を放したブレイズが、振り返りざま問い掛ける。

つい今し方まで強い力で掴まれていた腕をふいに開放されたパティスは、無意識にそこをさすった。痛くはないけれど、薄っすらとブレイズの指の感触が残っていることに気付いたら、手を解かれたことが急に寂しく感じられた。それで、パティスは思わず彼の姿を求めて顔を上げていた。

「まさか貴方、気付いてないの？」

ブレイズの肩越しに、シルバミの煌ららかな金髪が揺れて見える。その光に誘われるように思わず彼女の顔を見遣ると、「呆れた……」と呟く困り顔があった。

「パティス。こんな男を好きになるなんて貴方、本当に可哀想……」同情の念を禁じえない、と言った表情でパティスの視線を捉えたシルバミが、当然といった態度でブレイズの横を素通りして、パティスを抱きしめた。

そうしながら耳元で「悪乗りした私も悪かったんだけど……」と小声で付け加える。

「えっ？ あ、あの……それってどういう……？」

驚いたのはパティスだ。いきなりこんな展開になるなんて露ほども思っていなかったのだから。

ビックリして彼女の腕の中で身じろぎながら、頭はフル回転で今囁かれたばかりの意味深な台詞について考える。

「だから……何の話だよ！」

そんな二人を見遣ってブレイズがそう言ったのも無理はなかつた。
「だってそうじゃない。貴方がハッキリ態度に表さないから……彼女、色々思い悩んでこんなに苦しんでるのよ？」

パティスを抱きしめていた腕の力をそつと緩めると、まだ頬に薄っすらと残る涙の軌跡を指で軽くなぞつて、シルバミが言う。

泣いてしまったことに気付かれていたというショックより、そんなシルバミの態度の方がパティスには衝撃だった。

「だから、何をだよ！」

シルバミをじつと見上げるような格好で固まってしまったパティスへちらりと視線を投げかけて、ブレイズが問う。

「ホント、貴方ってば呆れるくらい鈍感ね。じゃあ言つてあげる。

例えば……貴方が私のところに足繁く通わなくちゃならなくなつた理由から話したらどう？」

パティスを庇うようにブレイズとの間に立ちはだかつたシルバミの、凜とした声音が響いた。

「そ、それは……」

シルバミに挑むような強い口調で語りかけられたブレイズが、困ったように視線を逸らす。

その様子に、パティスは何が何だか分からなくなった。

「あ、あの、今のって、どういう……？」

問いを投げかけたのはブレイズではなく、シルバミに。

しかしシルバミはそんなパティスの口元を人差し指で制すると、

「答えはブレイズに直接言わせなきゃ」

そう言ってパティスにウィンクしてから、そつばを向いたままでいるブレイズの方へ向かって歩き出した。

てつきり、こちらを見ようとしないうブレイズに何かアクションを起こすのだとばかり思っていたら、シルバミは彼の傍らをすり抜けるようにして通り越した。そうしてそのままの歩調で廊下の突き当りまで歩いて行ってしまふ。

シルバミが立ち止まったのは、丁度ブレイズが寝室にしている地下室入口がある辺りだった。パティスの目には何の変哲も無い石畳が続いているように見えるけれど、しょっちゅうそこでブレイズが出てくるのを待ったことがあるので間違いないはずだ。

そう思っただけ視線を送るパティスに、にこりと微笑んで見せると、無言で石畳にそつと触れるシルバミ。――と、何もなかったはずのそこにポツカリと穴が口を開いた。

それはパティスがどんなに頑張っても開けられないはずの、地下室への扉だった。

ブレイズにしか開けられないと思っていたそこが、シルバミには簡単に通路をさらけ出したことに、パティスは少なからずショックを受ける。

地下室入口が、そのままブレイズの心の扉のように見えてしまっ

たからだ。

（やっぱりシルバミは私なんかより、ずっとブレイズの心の奥まで入り込んでるのね）

ほんの少し前までのシルバミの言動に少なからず安堵しかかっていただけに、衝撃は大きかった。

パティスの少し手前でシルバミの様子を目で追っていたブレイズにしても、別の意味でそれはショックだったようで。

「おい！」

地下室への階段へ、シルバミが一步踏み出したと同時に電気に打たれたようにビクリと身体を震わせると慌てて走り出した。

結果、一人取り残される形になってしまったパティスも、寸の間遅れる形でブレイズの後を追う。

「勝手に入んなよ！」

今にも地下の闇へ沈まんとしていたシルバミの白い腕を慌てて掴むと、ブレイズが彼女を押し留める。

「パティス、見てご覧なさいな」

その様子を階段脇で不安そうに見詰めていたパティスにシルバミが声を掛けると同時に、暗かった地下への通路にいくつもの明かりが灯った。

（……えっ？）

ブレイズが灯してくれたのだろうか？

今の今まで光源が殆どなく、暗闇の底を一切見通すことが出来なかったパティスは、一瞬にして明るくなった地下の様子を、ブレイズの肩越しに観た。

続く

- 17 - (後書き)

次回更新は6/19の予定です

「え……？」

眼下に広がる光景に、思わず声が漏れる。それと同時に無意識に足が前へ出ていた。

炎に照らされた階段は危なげなくパティスを階下へといざなう。驚いたことに、灯りはパティスが床へ足を下ろすと同時に地下室全体を照らすいくつもの炎へと分裂して等間隔に散らばっていた。それで明るくなった地下室全体を難なく一望出来たパティスだったが、その光景を確認して思わず動きが止まってしまう。

以前ブレイズに伴われて数回入ったことがある地下——ブレイズの寝室——だったが、前と随分印象が変わってしまったからだ。（こんなにサッパリしてた？）

パティスの記憶にあるそこは、もつと物置然としていたはずだ。所狭しと物が置かれたその中に、まぎれるようにしてブレイズが寝所として使っている黒塗りの棺が置かれていた。それを初めて見たとき、パティスは余りにオーソドックスすぎる吸血鬼の寝床に苦笑してしまったのだ。

それが、なくなっていた。

代わりに部屋の隅に、キングサイズはあろうかという大きなベッドひとつだけが残されていて。

（あんなの、あった……？）

ふとそう思ったけれど、きっと今まで沢山の物に埋もれていて気付かなかっただけだろう。

他のものはあらかた取り除かれた部屋の中で、余りに大きすぎてそれだけここから運び出せなかったのかも知れない。

「綺麗に片付いてて驚いたでしょう？」

息を呑んで立ち止まったままのパティスの横へ、いつの間にかシルバミが立っていた。

振り返ると階上に苦虫を噛み潰したような顔でブレイズが突っ立っていた。

「ほら、観念して貴方も下りてきなさいな」

そんなブレイズに、シルバミがそう声を掛ける。

まるで駄々っ子をあやすかのような口調に、ブレイズが益々渋面になった。しかし、そのままではまた同じように言われると思ったのだろう。

ムスツとした表情はそのままに、地下へと降りて来た。

「ブレイズ……」

シルバミとは逆側に——つまりはパティスを挟むようにして——並んだブレイズに、パティスは伺うように声を掛けた。

「ここ、どうなっちゃってるの？」

自分が知らない間にこんなに綺麗に片付いてしまっている。

もしかしてブレイズは引越しなどを考えているのだろうか？

ふとそんな考えが浮かんでしまった不安から、彼を見詰める視線が僅かに揺らいだ。

その自分の声は聞こえているはずなのに、ブレイズは何も答えてくれなくて——。

そんな沈黙にパティスの精神状態が極限に達しかけたとき、シルバミが小さく溜め息をついた。

「この期に及んでまだこの子に言うの、躊躇ってるの？」

見た感じそんなに年は離れていないと思うシルバミに、「この子」などと子ども扱いされた気がして……パティスは何だか居た堪れない気持ちになる。

確かに彼女に比べれば自分は随分發育不良のような気もする。

情けなくてうつむいてしまったパティスの肩を、当のシルバミが元気付けるようにポンポン、と軽く叩いた。

「パティス、大丈夫よ。そんなに不安に感じることはないわ。だってこの部屋は——」

だんまりのブレイズに業を煮やしたのか、シルバミがそう話し始

めたとき、今まで無言だったブレイズが口を開いた。

「――俺から話す。シルバミ、悪いがちょっと席を外しててくれな
いか？」

続く

ブレイズの台詞でシルバミが地下を後にすると、パティスは図らずもブレイズと二人きりになってしまった。

そのことにドギマギとしてしまう自分を鼓舞して眼前の男を見遣ると、彼も照れ臭いのか、ほんの少し視線を逸らせた。

でも、外した視線とは裏腹に、意を決したようにポツリポツリと語り始める。

ここのところブレイズが夜になるとそそくさと出かけていた理由はこの部屋をこんな風に改造する為だったこと。

部屋の中央にドン、と置かれたベッドはブレイズの手作りであるということ。

これを作るに当たってシルバミに製作場所を提供してもらったということ。

「え、でも……」

何のためにこの地下をそんな風に変える必要があったというのだらう？

ブレイズの説明を一通り聞き終えたパティスは、至極最もな問いを口にした。今までブレイズとこの城で暮らしてきて、先のままで何ら支障はなかったからだ。——それなのに今更何故？

「いや、それは——」

パティスの困惑した表情を見て、ブレイズが気まずそうに視線を伏せる。

その煮え切らない態度を見ていたパティスは、ふとあることに思い至った。

「……シルバミさんと一緒に眠るため……？」

頭に浮かんだ答えを思うままそう呟くと、そんな気がしてきた。

だからこそ自分には秘密だったんだろう。

そう考えると、一気に悲しくなってきた、今度はパティスがブレイズから視線を逸らす番だった。

だが、そんなパティスの言葉に、ブレイズが素っ頓狂な声を上げる。

「はっ？ 何だよ、それ！ どうやったらそーいう発想になるんだよ！」

次いでそんな風に真っ向から否定されれば、思わず顔も上向きうというもの。

「……違うの？」

恐る恐るそう問いかけるパティスに、真っ赤な顔をしたブレイズがしどろもどろ口を開く。

「これは……その……お前のためのベッドだよ」

ブレイズの口調もさることながら、発せられた言葉の内容が理解できなくて、パティスは一瞬固まってしまった。

「——え？ 私……？」

しばし彼の言葉を頭の中で咀嚼して……ようやくそう言つと「ああ」とつつけんどんに返された。

「でも……私のベッドなら……」

上の階にちゃんと立派なのが置いてあるはずだ。

そう言おうとしたら

「あれじゃ二人は無理だろ……っ！」

自棄になったような口調でブレイズが吐き捨てた。

「え？ 二人って……」

そこまで言ってから、パティスはある考えに思い立って口を閉ざした。思わず真っ赤になつてこれ以上要らない事を言うのを防ぐかのように唇へ手を当てたパティスに、ブレイズがぶつきら棒に言う。「この城の中で俺とお前のほかに誰がいるんだ！」

そこまで言わせるなよ……と機嫌悪そうにそっぱを向くと、それでも言わなければならぬと思ったのだろう。その状態のままブレ

イズが口を開く。

「お前が病気になったとしても今のままじゃ俺、ずっと付いてやる事も出来ねえだろ。だから……」

大きなベッドを地下に作ることでそれを回避しようと思ったのだという。

遠い昔、眠るときに自分に手を握っていて欲しいと請うた幼い日のパティスが脳裏に浮かんだのだという。

自分と違って人間の身であるパティスは、長い年月一緒に過ごせば病気になることもあるだろう。そんなとき、日の出を気にして看病するのはご免だと思ったと言うのだ。

そう思っている矢先、パティスが本当に倒れてしまった。

だから余計に焦ったのだ、とブレイズは言った。

「ベッドを早く完成させなきゃなんねえと思うのに、お前が心配で出かけることも出来なかった……」

シルバミがこの城を訪れたのはそんな矢先だったらしい。

「シルバミには俺にはないコネが沢山あつてな……」

ブレイズと違って、シルバミには人間の知り合いが比較的沢山居るらしい。

「俺はずっとここに住んでるから……人間との関係はお前も知ってる通りだ。けど——」

彼と違ってひとところに留まらない生活をしてきたシルバミは、それなりに人間たちとの付き合いもあるらしい。

そこまで、ブレイズが話すのに任せて黙って聞いていたパティスだったが、そのまま聞いていたら話が見えなくなりそうだった。それで、ずっと気になっていた質問をぶつけてみた。

「あの……ごめんなさい。ひとつ聞いてもいい？」

話の腰を折る形になったことを一言詫びると、ブレイズは「どうぞ」と言ってくれた。

「シルバミさんって……もしかして人間じゃない……？」

ブレイズの口ぶりもさることながら、パティス自身シルバミと一緒に居て、腑に落ちないことが度々あった。

彼女の移動速度が異様に速いことに驚かされたり、彼女の瞳に射すくめられてしまったことなど。考えてみれば、シルバミは人間離れした部分が多々ある女性だ。

ブレイズの表情を窺うようにしてそう問いかけると、彼は一瞬ハッとしたような表情になった。

「そっぴゃ、お前にはまだ話してなかったっけな」

ややして吐息をつくのとほぼ同時にそう言くと、ブレイズは遠い目をして語り始めた。

- 19 - (後書き)

二人とも照れまくりです(笑)。

「俺とシルバミが初めて出会ったのは……今から大体六十年ぐらい前のことだ」

いつものように夜の散歩に出かけたブレイズは、たまたま見上げた窓の中に物憂げに外を見詰める女性の姿を見つけた。

年の頃は二十歳になるかならぬかと言ったところ。

普段なら自分から見知らぬ人間に近付くなどと言う暴挙には出ないブレイズだったが、彼女の紙のように蒼白な面をおもて一目見て、そのまま通り過ぎることが出来ない何かを感じた。

「満月の明るい晩でな。月光を受けた彼女の顔が余りに白くて驚いたんだ」

見た目だけで判断すれば、とても若い娘のはずなのに、余りにもその顔から生気が感じられなくて。

およそ生命力に溢れる人間の肌とは程遠い青白さに驚いたブレイズは、思わずその身を彼女の居る部屋の窓へと舞い上がらせた。

窓はブレイズの背丈より大きな掃き出し窓の様相で、長身の彼でも背を屈めることなく出入り出来そうだった。さらに鍵なども掛けられていなかったので、ほんの少し引いただけで易々とその口を開けた。

先ほど窓辺に見えた女性は、突如入ってきたブレイズに何度か眼をしばたいたけれど、さして驚いた風もなく彼を見詰めてくる。ややあつて、ベッドに半身起こすようにして腰掛けていた彼女に誰何の声を掛けられて、ブレイズは思わず素直に自分の名を名乗っていた。

その態度に少し気圧されながらも「お前は？」と問えば「シルバミ」と返ってきた。

突然の闖入者に淡い笑みさえ浮かべて受け答えをする彼女に、ブ

レイズは不思議な魅力を感じずにはいらなかった。

「色々話す内にシルバミがその当時の医学じゃ治せない病に掛かっていることが分かったんだ」

小さい頃から病気がちで、一年の大半をベッドの上で過ごしてきたと言う彼女の話を聞いて、ブレイズはシルバミの肌の色が青白く見えるほどに白い理由を知った。

ただ、手に触れれば温もりを感じられたし、じっと観察していれば大人しい中にもそれなりに表情をコロコロと変える彼女を見ていて「生きているんだな」という実感は湧いた。

シルバミの、実年齢よりもはるかに老成して見える魅力に加え、数百年ぶりにまともに人と話せたことが嬉しくて、それからの数ヶ月間、ブレイズは彼女の元を足繁く訪れた。

そして、運命の日がやってきた――。

続く

「あの日、窓の下から見上げたシルバミの部屋が、いつもとは違ってたんだ」

いつものように夜を待つてシルバミの寝所をおとなったブレイズだったが、近くの路上に降り立ってふと見上げた窓の中が、普段にはなく騒がしいことに気付いた。

騒がしい、と言つても物理的に物音がしてくる、というわけではない。

何か室内で沢山の人影が蠢いている気配を感じただけだ。

でも、今までこんな夜更けに彼女の部屋に自分以外の——それも複数の——来訪者がいたことなんてなかったのだ。おかしいという思いは、すぐに不安へと変わった。

（何かあったのか？）

そう思つて窓の内側に意識を研ぎ澄ましてみれば、金属の触れ合うような微かな音や、バタバタとせわしなく室内を駆け回る音が聞き取れる。

そればかりか——。

（血……？）

この鼻腔をくすぐる僅かな香りは紛れもなく若い女のそれで……。実際、ブレイズは彼女の血のにおいを直に嗅いだことはなかったけれど、直感でこの血の主はシルバミだと解った。

そうなると居ても立つても居られなくなった。

「シルバミ……っ！」

思わずそう叫んで、人外の跳躍力で高い位置のテラスに飛び乗ると、そこに彼女以外の人間が居るということも忘れて中に踏み込んでいた。

と、同時に当然のごとく唐突な闖入者へと一斉に向けられるいくつもの視線。

いつもなら一番恐れるべきはそんな人間たちの好奇の眼だった。
でも、それすら気にならないほどにそのときのブレイズは取り乱
していた。

「シルバミ！」

叫ぶと同時に見慣れたベッドを取り囲む人間たちを押し退けるよ
うにして、彼女の傍へと走り寄っていた。

普段から他の人間たちより青白い顔をしていたけれど、今、目の
前に横たわる彼女のそれはいつものものじゃない。

思うと同時に奪うようにして掴んだシルバミの手は、いつになく
力なく、そしてヒンヤリとしていて――。

「おい、こら！ 目え開ける！」

周囲の者たちがそんな自分の行動を見て、ハッとしたように彼女
から引き剥がそうと手を伸ばしてくるのを一睨みで制すると、後は
もうただ無我夢中で呼びかけた。

そうしながら頬を数度軽くはたくと、その痛みでか、「んっ」と
短く身じろぐ気配がして……。

ややして薄っすらとシルバミの双眸が開かれた。

「……ブレ、イズ……？」

ややして掠れた声でそう呟くと、それだけで疲れたというように
ゆっくりとまぶたを下ろそうとする。

それだけでブレイズにはハッキリと解った。

彼女の命の灯火が、今まさに消えかかっているということが――。

シルバミは人間だから、自分より先に逝くだろうことは漠然と判
っていたつもりだ。

でも、それは今じゃない。

そう思うと同時に、ブレイズはシルバミをベッドから抱き上げる
と、窓の外へと踊り出していた。

続
く

ぐったりしたシルバミを抱きかかえたまま、ブレイズは飛ぶように夜の街を駆け抜けた。

どこへ……と頭で考えるより先に足は自然と自分の屋敷を目指す。誰からも邪魔されずにシルバミと向かい合える場所。

例え町中がひっそりと寝静まった夜とはいえ、他の場所ではどこから邪魔が入るか分からない。そんな面倒を処理できる自信が、今のブレイズにはなかった。

通常、人の足なら三十分は優にかかる道のりを、ブレイズはものの数分で飛び越えると、結界で守られた邸内へと辿り着いた。

普段リビングとして使っている部屋へ彼女を連れて行くと、すぐさま近くのソファへ横たえる。

その気配にシルバミが薄っすらとまぶたを上げた。

その、生気を感じられない目を見詰めていたら、ブレイズは再び強い焦燥感に駆られた。

「シルバミ……」

長いときを一人で生きてきた彼だけれど、実際消えゆくとしている人の命を目の当たりにしたことは皆無だった。

「お前、その若さで……まだ死にたくはないだろう？」

普段の自分なら諦観とともに素直に見送れるはずの他者の死。

それがどうしても許せなくて……思わずそんなことを聞いてしまふ。

考えてみれば、ブレイズは今まであんな風に一人の人間とともに時を重ねたことはなかったのだ。

その、他者へ対する執着とも呼べる感情が、今のブレイズを突き動かしていた。

普段の彼からは想像の出来ない必死な形相でそう問いかけてくるブレイズを見て、一瞬シルバミの双眸が見開かれる。

そうして束の間逡巡するようにゆっくりと閉ざされたあと、ほんの少しだけ首がこくり、と頷いたように見えた。

余りに弱りすぎていて口は利けないようだったけれど、その動きだけでブレイズには充分だった。

「……分かった」

意を決したようにそんなシルバミの手を力強く握ると、次の瞬間、何を血迷ったのか、ブレイズは自らの左手首を右手の爪で切り裂いた。

途端、当然のようにパタパタと血液が床へ零れ落ちる。

それを気にした風もなく——いや、そればかりか当然といった面持ちで——ブレイズは温かい血の溢れる傷口を、そっとシルバミの口元へ近づけた。

彼が人間ではないからか、ものの数秒の間に既に半ば塞がりかけた傷口から、それでも二滴、三滴……と滴り落ちる深紅の血。

それが彼女の口腔内へ吸込まれるのを見届けてから、ブレイズはホッとしたようにシルバミから離れた。

そうして静かに彼女の規則正しく上下する胸を見下ろすこと数秒。ほんの一瞬、呼吸が停止したようにシルバミの身体から全ての力が抜けた。

しかし、それは本当に一瞬のこと——。

「……ブレ、イズ？」

静かに見下ろす視線の下で、シルバミがゆっくりとまぶたを上げた。

ブレイズの顔をじっと見詰め返してくる瞳は、先ほどまでとは打って変わって生気が漲って——。

「あの……私……？」

自分でも自らの身体に起こった変化が飲み込めないのだろう。きょとんとした顔で数度瞳を瞬かせると、シルバミは恐る恐るその身を起こした。

そうして一言、

「信じられない……」
そう、呟いた。

続く

「あの……それって……つまり……」

今まで黙ってブレイズの一人語りを聞いていたパティスだったが、そこで思わず口を開いていた。

「俺が……一時の感情で彼女を同族にした張本人ってことだ」

シルバミと接していて何となく感じていた違和感。その正体は何となく分かっていたけれど、そうなった経緯を突如明かされて、パティスは困惑気味に数回瞳をしばたいた。

そうしながら、今告げられたばかりのブレイズの言葉をゆっくりと咀嚼する。

「人間のままじゃ、あいつの命、助かりそうになかったんだ。……だから」

先程の言葉をまだ消化し切れていないのに、また新たにそう付け加えられて……パティスは混乱の余り言葉を紡げなくなる。

ブレイズがシルバミのことを親しげに「あいつ」と称したことも、迷走する気持ちに拍車を掛けていた。

そんなパティスの様子を、ブレイズは自分への非難と受け取ったらしい。

それまで躊躇いがちにではあったが、真っ直ぐパティスを見詰めていた黒瞳に、ほんの一瞬悲しそうな色が揺れる。

それを見て、パティスは余計にどうしていいか分からなくなる。

「あの、ブレイズ……違うのっ」

何が違うのか……。それすら上手く説明出来ないまま、思わずそう口走ってから、恐る恐るブレイズの手を取った。

その感触にブレイズがビクツと肩を震わせる。

（もしかしてブレイズ、凄く怖がってる……？）

何を恐れているのかは分からない。でも、彼の反応からそんな気配を多分に感じてしまったパティスは、その気持ちを宥めるように

触れた指先にほんの少し力を込めた。

（私を信じて――）

そう、念を込めながら。

ひた、とブレイズを見据える瞳から、その思いを汲み取ってくれたのだろう。

ブレイズの身体から、張り詰めていた気配が消える。

それを見届けてから、パティスは慎重に言葉を選びながら口を開いた。

「……私、ブレイズがシルバミさんを自分と同じにしちゃったってこと、責める気持ちがあつて黙り込んだわけじゃないの。……ただ、前に貴方からそんなに簡単に仲間は増やせないって聞いてたから……だから驚いただけで……」

それは同時に、自分は絶対にブレイズと同じ時は過ごせないのだと、その寿命の隔たりを諦めていた私って何だったんだろう、と感じる瞬間でもあった。

そうして……認めたくないけれど……ブレイズによって彼と同じぐらいの時間ときを生きる権利を与えられたシルバミに嫉妬すら覚えたのだ。

それは、生まれつき身体の弱かったシルバミの境遇を思えば、何だか申し訳ないようなどす黒い感情に思えて。

それで口を開けずに黙り込んでしまった。

本当はそのこともちゃんと説明しなくてはいけないんだろうが、パティスにはそんな自分の後ろ暗いところをブレイズに話せる勇気がなかった。

だから無難な理由だけ告げて本音は隠す形になってしまったのだ。ちよっぴり胸の奥が痛んだけれど、ブレイズと触れ合う手にほんの少し力を込めることで、その感覚を何とかやり過ごした。

心の一部を隠した今の説明で、ブレイズに真意が伝わったのだろうか？

ふと至極当然な不安に駆られて彼の顔を見遣ると、ブレイズの表

情がふつと和らいだ。

「俺は……さっきお前が黙り込んだとき、正直こんな話をしてお前に嫌われたんじゃないかと思っちまったんだ」

貴方は何て自分勝手なことをする人なの？と非難されても仕方ないと思う反面、パティスからそう言われたらと思うと怖くて堪らなくなってしまうのだ、とブレイズが告げる。

日頃そういうことを口に出すタイプではないだけに、その言葉はパティスの心を深くえぐった。

「……私、そんなこと、ちっとも思わなかった！ だって……シルバミさんに嫉妬する気持ちの方が強かったんだものっ」

それで思わず先ほど飲み込んだ言葉を吐き出したら、ブレイズにギョツと抱きしめられた。

「……馬鹿だな」

そうして耳元でボソリと呟かれた言葉に、パティスは心の中で「お互い様よ」と付け加えた。

二人、地下でお互いの体温を確認するかのように身を寄せ合ったまま立ち尽くしていた。

どのぐらいそうしていただろう。

「――ね、話は終わった？」

突如、笑みを多分に含んで投げかけられた言葉に、思わずどちらからともなくビクリと身体を震わせた。

「あつ、ああ……」

パティスを抱き締めていた腕を素早く解くと、やや上ずった声でブレイズが返す。

そんな二人のやり取りに、パティスは頬が一瞬にして熱くなるのを感じた。今顔を上げたら、真っ赤になっっているのをシルバミに悟られてしまうかもしれない。そう思ったら、ただただうつむくしか出来なくなってしまった。

「色んな誤解もちゃんと解いたんでしょうね？」

先の声音の通り、その口元に微かな笑みを湛えたまま、シルバミが足音もなく階段を下りてくる。

よくよく考えてみれば、今まさに彼女が地下に降りて来るところだということは、角度的に考えて抱きしめられていたところは見られてはいないのかも知れない。

寄り添う自分たちの姿を揶揄するように聞こえた声も、もしかしたら己の恥ずかしさが生んだ気のせいだったのかも？

そう思い直したパティスは、それでも一度火照ってしまった頬の熱がなかなか下がってくれなくて、顔を上げることが出来ないでいた。

そんなパティスに気付いたのか、ブレイズがシルバミとの間に立ち、その背後に庇うような格好で視界を遮ってくれる。その優しさが、今はただただ有り難くて。

「……パティス？」

けれどそんな風に名指しで呼ばれては、いつまでも隠れているわけにはいかない。

「……っ」

呼びかけるシルバミの声に、一瞬小さく身体を震わせてから、それでも何とか自分を鼓舞して顔を上向ける。

「……はい？」

わざとらしく聞こえてしまったかも？

そう思いながらも、平常心を装ってなるべく落ち着いた声音でその返事をすれば、シルバミがふんわりと微笑みかけてきた。

「ね？ 心配することなんてひとつもなかったでしょう？」

次いで柔らかな調子でそう問い掛けられて、パティスは半ばつられるように頷いてしまった。

「ブレイズはね、貴方のこと、とっても大事に思ってるの。そりゃもう、私なんか入り込む余地もないくらい」

フツツと微笑交じりにそう言われて、何だかとっても照れ臭くなってしまったパティスである。

照れ隠しにオロオロと視線を彷徨わせてブレイズに助けを求めれば、先ほどまでの優しさが嘘のように即座に視線を逸らされた。

「二人とも照れ屋なんだから」

そんな二人の様子をからかうように再びクスツと笑うと、シルバミは舞うような動作でベッドへと近付いた。

そうして白い繊細な指で木製の縁をなぞるように撫でながら、ポツリポツリと語り始めた。

- 24 - (後書き)

私事で大変恐縮なのですが2011年2月24日に第一子を出産しました。

新米ママのため、慣れない子育てに四苦八苦の毎日を過ごしています(。°。 ;ノ)ノ

そのため小説の更新がしばらくの間滞ってしまいましたが、ご了承頂ければ幸いです。

何とか自分なりにペースを掴んでなるべく早めに連載を再開したいと思っていますので今しばらくお待ち頂ければ幸いです。

2011年3月17日 鷹槻れん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072b/>

光と闇の境界線

2011年4月11日12時21分発行